

私はエッセイを書く

若松由希久

エッセイというものを一度も書いたことがなくて、でも何かエッセイらしきものを書かないといけない、となったとき、何のアイデアもなくやみくもにまっさらなテキストエディタに向かうよりも、そもそもエッセイとはいかなるものか、どういう文章が一般にエッセイと呼ばれるのか、をまず考えてみることから始めるべきではないか。それによっておのずと自分に書けるものも見えてくるように思う。

「エッセイ」と聞いて私がまず連想するのは「軽妙」というワードである。これはつまり、何でもない平凡な日常のシーンを、決して平凡ではない面白い切り口で描いてみせるもの、しかもその文体は軽妙かつ洒脱、当意即妙、エスプリにあふれている、そういった文章がいわゆるエッセイであると私がイメージしているからだろう。

これは実際に書くとなるといかにも難しそうである。群ようことか林真理子とか、その道を極めた作家による名人芸の世界というか、とても素人に真似できるものではないと感ずる。

しかしエッセイの世界は広い。そういう日常系というか軽妙洒脱系のエッセイばかりがエッセイではないことを私は知っている。たとえば戦争体験や、愛する者との死別、などに材を採ったヘビーな話もエッセイと呼ばれることがある。題材となる体験そのものに特殊性があれば、文才やエスプリに欠けるところがあっても、それなりに読ませる文章になるのではないか。

ところが問題は、私に戦争体験がないということである。大きな災害にも遭ったことがない。幸せなことだ。十年ほど前に父親を亡くしているけれど、八十歳を過ぎて病院で亡くなったというだけで、自分の中で感じることはさまざまにあるものの、ことさら人様に語るようなことは見つけられない。

日常系は難度が高く、非日常系も体験の特殊性に依るので難しいとなると、私にはエッセイを書くことができないのか。いや、そうじゃない。日常系と非日常系の中間にも、じつは多くのエッセイが存在しているのであって、そのひとつがいわゆる旅行記というジャンルではないだろうか。

日常ではないけれど、戦争や災害ほど特殊でもない、あくまで個人の意志によって入っていくことのできる非日常空間。それが旅行だ。その顛末を書いてエッセイになるのなら、自分もとにかく旅行にさえ行けば何かしら書けるような気がする。

というわけで私は旅に出ることにした。四月某日、新大阪から新幹線に乗って岡山へ向かった。なぜ岡山かというと、真備町というところに横溝正史が戦時中疎開していた家が残っていて、一般に公開されているらしいとネットで見たからである。その疎開宅の周辺には、正史が散歩の途中に腰かけて構想を練った石とか、「本陣殺人事件」など初期の金田一ものモデルになった場所なんかが今でもたくさんあって、ウォーキングコースとして整備さ

れているらしい。また、コースの要所要所に、金田一耕助はじめ、作中に登場するキャラクターのブロンズ像が立っている、というのも楽しそうであった。

岡山駅には、拍子抜けするほどあつという間に着いた。一時間もかからなかった。私は旅行というものをほとんどしたことがないので、大阪から岡山がこんなに近いとは知らなかった。一応、一泊する予定ではあるが、これだけ近いと旅行というのも違うような気がしてきた。

伯備線に乗り換えて倉敷へ向かうつもりだったが、せっかくだからと思い、とりあえず岡山駅でも降りてみることにした。駅前広場は妙にだだっ広く、平日の午前中なのになぜか制服姿の高校生たちがあちこちにたむろしていた。周りには商業施設らしきビルが並んでいて、知らない街に来たなーと思ったものの、とくに珍しいものは見つからなかった。広場の真ん中で、高校生たちに囲まれ、急に何をしたらいいのかわからなくなった。仕方なく目の前にあったビックカメラに入ってみた。

時間帯のせいだろうか、客が全然いなかった。スマホの新機種を見ようと思って、地階に降りた。妙に薄暗く感じて、気味が悪い。なんでこんなところに来たんだろうと、気が滅入った。ほかに客がいないせいで売場を見ても落ち着かず、すぐに出た。駅に戻り、何か食べようかと店を見て回ったが、気がつく改札の前まで来ていたのでそのまま電車に乗った。

よく晴れた日で気温も上がり、車内は暑くて不快だった。倉敷には正午ごろに着いた。その日は倉敷を観光して、横溝正史疎開宅のある真備町には翌日行くつもりだった。とにかく腹ごしらえをしようと思って駅周辺を歩いてみたが、よく知らない店に入るのは緊張するし嫌だなーと思い、宮本むなしに入ってチキン南蛮定食を食べた。いつも通りの味であった。古い町並みが保存されているという倉敷美観地区というところへ行ってみると、古い町並みが保存されていた。自分でも驚くほど感興が湧いてこない。何を見ても何とも思わないのだ。ただ歩くのに疲れただけだった。

ホテルに行って部屋で休みたかったけれど、時刻はまだ午後一時。チェックインは四時なので、まだまだ時間をつぶさないといけない。何をしたらいいのだろう。絶望的な気分になった。駅の近くにアリオ倉敷というショッピングモールがあったので入った。店内はまたしても男女の高校生であふれていて、うるさくて本当にげんなりした。少子化問題とか言うけれど、岡山にはこんなにも元気で活力に満ちた若者がわんさかいるじゃないですか。ほんましんどいわ。とか思っただけの公園みたいなどころへ出てベンチに座り、スマホを見たり通るかかった犬を見たり、少しウトウトしたりして数時間を過ごした。

四時になったのですぐに予約していたホテルへ行きチェックインした。部屋で岡山ローカルのテレビを見ているうち、早く帰りたいって仕方がなくなってきた。家に残してきた猫のチビちゃんのこと心配だ。横溝正史の家とかよく考えたらべつにそんなに見たくない。今すぐ帰ろうかと本気で思っただけれど、とにかく今日のところは予定通り一泊することにした。「せっかくなら来たんだから」という気持ちがかろうじて勝った、というよりも、さつきチェック

クインしたばかりで直後にチェックアウトする、という破天荒な行為の恥ずかしさに耐えられそうになかっただけである。

明日の朝イチで帰ることにしようと思った。ベッドでごろごろしていたら、少し疲れがとれてきた。そうすると今から寝るまでの時間をどうすべきかまた迷い始め、その時点で夕方六時だったのだが、今から真備町の横溝正史疎開宅に行ってみようと唐突に考えた。

ホテルを出て、また伯備線に乗った。ラッシュの時間帯にぶつかってしまったようで、車内は大混雑していた。出てきたことをもう後悔していた。我慢して吊り革につかまっているうち電車は目的の清音駅に到着した。

日がどんどん落ちていく中、横溝正史ゆかりのウォーキングコースを歩いた。途中、大きな川があり、はるか向こうの対岸へ渡る長い長い橋が架かっていたのだが、その橋の半ばまで来たときだった。川の中を、子犬くらいありそうな巨大なネズミが泳いでいたのだ。思わず「アアツ」と声を上げて驚愕した。とんでもないものを見てしまったと思った。あとで調べてわかったのだが、それはネズミではなくヌートリアという外来の生物であり、おもに岡山の川に生息しているという。

なんかわからんけどあの生き物かわいかったなー、また見たいなー、とヌートリアの記憶を反芻しながら歩くうち、とうとう日は完全に落ちてしまった。辺りは行けども行けども田んぼや畑ばかりでろくすっぽ街灯もなく、ほとんど真っ暗闇である。川を渡ってからというもの、一人の人間とも行き会わない。非常に不安な気持ちで、それでもグーグルマップを頼りに予定通りの道を歩いた。一時間くらい歩いてやっと横溝正史疎開宅に着いたものの、もちろん開館時間は過ぎていて入ることはできない。真っ暗な中、フラッシュを焚いて外観の写真だけ撮った。

闇の中からいつ殺人者が現れるかわからないような恐怖を常に感じながら歩いた。と、目的のひとつである金田一耕助のブロンズ像が突然目の前にあった。小さくて驚いた。実物大のものだと勝手にイメージしていたのだが、実際にはちょっと大きめのフィギュアくらいのサイズだったのだ。一応写真を撮った。

えんえんとあぜ道を歩いたのち、大通りに出る手前には、「八つ墓村」に登場した森美也子（野村芳太郎監督映画版での小川真由美演じる森美也子がとても素晴らしかった）の像もあった。これも写真におさめようと、カメラを構えて像の周囲をウロウロしていたら、急に宙に浮いた感じがして、あつと思ったら側溝に落下していた。それほど深くなかったので数か所を擦りむいたくらいで済んだ。水も流れていなかったので濡れることもなかった。でも溝に落ちたのなんて小学生以来だったせいかな、けっこう大きなショックを受けた。なんだか茫然としてしまった。

以降は肩を落としてトボトボと歩いた。昼間はあんなに暑かったのに、このあたりから急に寒くなってきた。駅で電車を待つ間（なんと一時間近く待たされた）震え続けた。

ホテルに戻ってコンビニで買ったパンを食べ、すぐに寝た。翌朝七時の新幹線に乗り大阪へ帰ってきた。朝の九時には自宅にいた。猫の顔を見てホッとした。

つくづく自分は旅行に向いてない人間であると痛感した。どこへ行っても自分からは逃れられない、というヘミングウェイの小説の一節が心に浮かぶ。つまらない人間、楽しみ方を知らない人間は、どんな素敵な場所へ行ってもやっぱりつまらないのだ。

はたしてこんな旅行がエッセイになるのだろうかと不安になった。で、実際に書く際の参考にしようと思い、旅行記的な読み物を探しに本屋へ行ったのだが、なぜか私が手に取ったのは志賀直哉の「城の崎にて」だった。エッセイじゃない。私小説だ。しかしエッセイと私小説の違いは私にはよくわからない。私小説だと、盛ったり実際にはなかったことを書いたりしてもオーケー、みたいな違いだろうか。

直哉らしき語り手が城崎へ療養に行って、蜂が死んでいるのを見たりイモリを偶然殺してしまったりして、死についても思う、という非常にナイーブかつセンチティブな内容で、大きな出来事は何も起きない。ここまで何も起きない旅（まあ冒頭で電車にはねられているけど）を題材にして、歴史に残る名作を書いてしまう直哉はさすがに小説の神様と言われるだけあるなーすごいなーと小学生的感想を持ちました。

参考にはならなかった。しかし、どんなつままない旅行をしても、何かは書けるはずなのだ。書けるかもしれない。少なくとも希望を持つことはできた。神様ならずとも。名作にはならずとも。きっと何かは書ける。と、信じて、私は、このたび、エッセイを、書いた。